

嫌われ者ゲーテの帰郷—自由ドイツ 財団と19世紀中期フランクフルトに おけるコメモレイションの政治性

櫻井文子

はじめに

ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（1749–1832）は、フランクフルト・アム・マインに生まれた著名人の中では、おそらく最も広く知られている人物だろう。しかし、彼の生地における評価が、19世紀後半に至るまで賛美と無関心、そして反感のない交ぜになった、アンビバレントなものだったことは、クロツァーやコッホといったフランクフルト史の研究者の間でこそ知られているものの¹⁾、ゲーテ研究者を始めとする他の研究者の間では注目されることのなかった問題である²⁾。そこで本稿では、19世紀の始めから自由ドイツ財団（Freies Deutsches Hochstift）による1864年のゲーテの生家復元工事終了までの、約60年の間にフランクフルトで行われた、ゲーテの記念事業を分析することで、彼の生地における評価を改めて考察したい。その上で、自由ドイツ財団の活動によって、フランクフルトにおけるゲーテ評価がどのように変化したのか、また、それがどのような歴史的意義を持つのかを明らかにしたい。

自由ドイツ財団は、いわゆる「結社（Verein）」である。結社とは、体操会や合唱団、政治クラブのように、特定の目的のために個々人が自発的に集って結成した団体であるが³⁾、余暇の過ごし方から政治経済の動きま

で、19世紀の市民生活のあらゆる側面を支えた社会組織として、1970年代以降多くの歴史家が研究してきた。このように結社研究が興隆した一因は、国家や民族、階級といった既存の範疇が取りこぼしてしまう社会集団を捉える枠組みとして、結社が有効なことにある。それまで見落とされてきた多彩な集団の価値観や生活世界を覗く「窓」として結社を重視する傾向は、特に日本の結社研究に強い。⁵⁾しかし本稿では、結社に集う人々そのものよりも、むしろそうした人々の支持を集めることができた結社の「引力」に注目することで、結社の別の側面に光を当てたい。つまり、特定の結社が支持者を得て興隆した歴史的要因を、本稿では自由ドイツ財団を例に考察する。なお、同財団の歴史については、財団自身の手で多くの研究が出版されている。⁶⁾中でもアードラーの研究は財団の設立とその後の活動を詳細に叙述している。しかし、財団を同時代のフランクフルトの結社文化や政治的・社会的な文脈に位置付けることを目的としたものではないので、その点でも本稿の考察には意味があるだろう。

本稿は3部構成になっている。まず1章では、ゲーテ評価が割れた要因について、彼の生き方と、自由都市として独自の住民意識を涵養していた19世紀前半のフランクフルトの状況を関連付けて論じ、世紀中頃までにフランクフルトで行われた、ゲーテに関する記念行事について概観する。2章では、フランクフルトにおけるゲーテ評価の重要な転換点になった、1858年の自由ドイツ財団の創立と、その財団に手で行われたゲーテの生家の買い取り・修復事業について見て行く。そして3章では、そうした財団の活動が、フランクフルトでどのように受容され、評価されたのかを考察したい。なお本稿では、主に自由ドイツ財団を含むフランクフルトの結社が所蔵する未刊行史料と、⁷⁾19世紀にフランクフルトで出版された定期刊行物や著作を史料として用いた。

1. フランクフルトにおけるゲーテの記念と評価

1879年、ゲーテの誕生から130年にあたる年、彼とフランクフルトの関係について回顧する評論は、「ゲーテの、彼の父なる町への関係は、大詩人の死後も尚、特異で奇妙なものだった⁸⁾」という一文から始められた。ゲーテの故郷でのアンビバレントな評価の一因は、生地よりも異国での栄達を選んだ彼の生き方にあった。ゲーテは、母方の祖父に市長職経験者を持つ有力者の家系に生まれ、いわば将来の栄達が約束された身の上だったにも関わらず、1775年、ワイマール公国に移り住むことを選んだ⁹⁾。そしてその後、彼が折に触れてフランクフルトに取った態度は、総じて淡泊、もしくは冷淡なものだった。例えば1792年、母方の伯父が他界したことで彼の議席が空くと、市はゲーテの母を介して彼の参事への就任を打診してきたが、彼はあっさりと辞退している¹⁰⁾。

ゲーテのフランクフルトにおける心証を決定したのは、彼による1817年のフランクフルト市民権の放棄だった¹¹⁾。その年までフランクフルトでは、市民権を放棄する者及び市民権を剥奪された者は、それまで享受した保護と特権の代価として、また税収減などの市が被る財政的な損害に対する賠償として、全財産の10%を支払うことが義務づけられていた¹²⁾。この年、この転出税 (Abzugsgeld) 制度が撤廃されたことを機に、ゲーテは正式にワイマール公国の臣民になることを選んだのである。

彼の選択がフランクフルトで反感を招いた理由は二つあった。まずは、時期的な問題があった。1817年という年は、ナポレオン戦争が終わって間もない時である。戦時中はフランス軍に占領され、また大陸封鎖によっても経済的に少なからぬ打撃を受けたフランクフルトでは¹³⁾、ゲーテの市民権放棄は、苦境にある故国を見捨てる行為として受け取られたのである¹⁴⁾。

二つ目の理由は、フランクフルト住民の自己認識に関わるものである。

自由都市として、特定の君主の支配を受けない独立した都市国家だった、当時のフランクフルトでは、臣下として君主の支配に服する他国民を一段下に見る意識が存在していた。例えば、『フランクフルト諸景』で19世紀初頭のフランクフルトの事物を描写した、聖職者・政治家のアントン・キルヒナー¹⁵⁾は、町の庶民の気質について次のように述べている。

どっしりと自信に満ちた足取りでその男は歩む。物怖じせず、彼は相手が誰であろうと顔を見る。厚かましく、彼はどんな取引にも割り込む。遠慮なしに、彼はどんな感情をも表す。いくつかの町の住民に見受けられる恭順の目つきが、その〔町の〕政治体制の正しい温度計なのだとしたら、この生意気な目つきは、ここでは上からの圧力がかかっていないことを証明しているのだ。¹⁶⁾

一介の庶民でさえ他人に頭を垂れる必要がない、そんなフランクフルトの自由と独立の気風が誇らしげに描かれている。このように、何人にも支配されないことを自由都市市民の矜持とするフランクフルトの住民にとっては、たとえ宰相としてとはいえ、市民権を捨ててまでして、ワイマール公という君主に恭順することを選んだゲーテの行動は、故国の名誉を否定するものとして理解されたのである。

ゲーテが市民権を放棄した時の住民の反応について、同時代の歴史家ヴァイルヘルム・シュトリッカーは次のように述べている。

〔1815年以降〕ゲーテは彼の父なる町を再び訪れることはなかったが、彼のフランクフルトの友人たちは、以降、人知れぬ同好会を作った〔中略〕。1817年12月2日に起こった、フランクフルトの市民団（Bürgerverband）からのゲーテの脱退が、あれ以上に悪く受け止められなかったこと、そしてそれにも関わらず彼の70

歳の誕生日がフランクフルトで賑々しく祝われることが出来たことは、彼らの功績だ¹⁷⁾。

このように、ゲーテと個人的に交流のあった人々を中心に、彼の選択に理解を示し、彼の業績を顕彰しようとする動きが存続する一方で、1817年を境に、フランクフルトではゲーテに対する否定的な評価も根を下したのである。

こうしたゲーテに対する反感を明確な言葉の形で残す史料は少ないが、その一例が次の引用である。ゲーテが60歳になった1829年、フランクフルトのある結社の年次総会の席で、地元の医師サロモン・フリードリヒ・シュティーベルが行った講演について、同席した人物が回顧したものである¹⁸⁾。

多くの乾杯の辞がされたが、シュティーベルが最後にゲーテに対して「乾杯の辞を」一つして、彼はそれを次のような言葉で締めくくった：「ゲーテは我々にはいつまでもかけがえがない（theuer）、それでも彼は収入税（Einkommenssteuer）を払ってくれない。」嵐のような拍手が起こった。周知のごとく収入税のために、詩人は彼のフランクフルト市民権を放棄したのだ¹⁹⁾。

原文では「かけがえがない（theuer）」と「収入税（Einkommenssteuer）」は韻を踏んでいる。「（値段が）高い」という意味もある teuer という言葉を使うことで、ゲーテをフランクフルトに留めるのは高くつく、と彼の現実主義的な生き方を揶揄したシュティーベルの言葉は、直にフランクフルト中に広まった²⁰⁾。

こうした風潮の中でも、ゲーテの友人らを中心に、彼を記念する事業は幾度か立案されたが、賛同者を得ることができず失敗を繰り返した。例えば1819年、ゲーテの70歳の誕生日を機に、元市長のゲルハルト・トーマス

らを中心に、住民から資金を募ってゲーテの銅像を設置する計画が提唱された。しかし町を流れるマイン川の中州に神殿風の記念堂を作るという計画は、結局出資者が集まらず、6年後中止された²¹⁾。また、彼を名誉市民として公的に顕彰しようという提議は、何度も繰り返されたものの、例外なく強硬な反対にあって退けられている²²⁾。こうしたゲーテ支持派の実らない努力を評して、1879年の上掲の評論は、彼らの輪は「少数の人間に限られていた上、古来より名高いマインの町で支配的な風潮を代表する者たちとは、とても見なすことは出来なかった」から、「この孤立したゲーテ同好会が行った、父なる町に偉大なる息子をより密接に結びつけようとする試みは、全て失敗したのだ²³⁾」と分析している。

しかしこうしたゲーテに対する風当たりも、彼の死後になると少し弱まった。1839年には、市の図書館に大理石製の記念碑が寄贈され²⁴⁾、その3年前の1836年に、町の美術協会（Kunstverein）が再び銅像の建立を計画すると、今度は資金が集まり、1844年10月22日、ルードヴィヒ・シュヴァーントラー作の銅像が旧市街の西端に設置された²⁵⁾。この事業は、一見順調に進展したが、実際には、設置場所を巡って銅像が完成する半年前になっても議論が紛糾したり²⁶⁾、披露式典の際の祝祭行列では町のツンフトが参加を拒否したり²⁷⁾、さらには公式の祝宴と同日同時刻に町の文化系の結社の一つである「イーリス（Iris）」が祝宴を開き、それが銅像設立委員会に対する抗議行動であると噂されるなど²⁸⁾、最後まで不協和音を伴った。当時、町の文芸雑誌に投稿された詩には、ゲーテに対する反感の残響と、彼を「同郷の人」として許容する姿勢がない交ぜに表現されているので、この節の最後にその一部を紹介したい。

青年として君が去ってから、何を／我々の選帝と戴冠の古都は／
 経験し耐え忍んだか／他の世紀には抱えきれないほどだろう
 千年の栄光が褪せるのを見た／飽くなき戦いの狂乱は／戦慄と年

代記の伝える通りで／長い間、運命は我々を憎んでいるようだった

しかし安寧と喜びは帰還し／今日、君が見るフランクフルト市民
は朗らかに／同郷の人よ、君の記念碑を取り囲む²⁹⁾

2. 自由ドイツ財団の創立とゲーテの生家

フランクフルトにおけるゲーテの位置付けは、自由ドイツ財団によるゲーテの生家の買い取り・修復と一般公開を節目に、一つの転機を迎えた。同財団の創立者オットー・フォルガー (Georg Heinrich Otto Volger, 1822–1897) は、ハノーヴァー王国の都市、リューネブルク生まれの地質学者・文筆家である。1856年、フランクフルトの自然誌研究のための結社である、ゼンケンベルク自然研究協会 (Senckenbergische naturforschende Gesellschaft) の地質学・鉱物学の講師に採用されたことを機に、フォルガーはフランクフルトに移り住んできた。それ以前のフォルガーは、1848年革命の時に政治活動に参加したことが災いして、スイスで流浪生活を送る身の上だった。1845年にゲッティンゲン大学で学位を得た後、母校で地質学の私講師をしていたフォルガーは、革命が勃発すると、地元の急進派の指導者の一人として、積極的に政治活動に参画した。自分が組織した集会の帰り道に襲われ、左腕に疵を負ったことは後の彼の武勇伝の一つだが、³⁰⁾こうした活動が仇となって、革命後フォルガーは失職した。移住先のスイスでも、各地の学校を転々とする不安定な暮らしが続き、フランクフルトに来る直前の彼は、チューリヒ大学の私講師として、僅かな収入で妻子を養っていた。³²⁾その彼にとって、ゼンケンベルク協会への招聘は、願ってもないことだった。講師の月給225グルデンは決して高くはなかったが、中産階層としての体面を保つことの出来る金額だったのである。³³⁾

ゼンケンベルク協会の講師としてのフォルガーの仕事は、週に2時間程度、協会の博物館で講義を行うことだった。³⁴⁾ 鉱物学・地質学を担当するフォルガーの他に2名、それぞれ脊椎動物と無脊椎動物の自然誌の講義を担当する講師が雇われていた。³⁵⁾ 協会の講義は一般に公開され、ギムナジウムなどの中等学校の上級生や教師、協会の会員は無料で聴講することができた。聴衆は主に学生と教師、医師が中心だったが、女性の聴講生も珍しくはなかった。³⁶⁾ 1856年の秋から始まったフォルガーの講義は、彼の弁舌の才もあって、人気を博した。³⁷⁾ 講師職の任期は3年だったが、彼の任期が切れる1859年9月、協会の運営会議が全員一致で契約更新を決定したことから、彼の講師としての才能を伺うことができる。³⁸⁾ フォルガーはまた、同協会に入会し、それまで放置されていた地質学セクションの担当として鉱物学・地質学コレクションの拡充に尽力するなど、仕事の傍ら、研究者としても積極的に活動した。彼の契約を更新する際に、ゼンケンベルク協会が100グルデンの特別手当を支給しているが、これは彼の協会に対する貢献への感謝を表すものでもあった。³⁹⁾ フォルガーが自由ドイツ財団の設立に乗り出した1859年は、ちょうどこの契約更新の頃である。フランクフルトに来て3年、彼の教育者・研究者としての評価も定まり、知名度も上がっていた時期である。

しかし、こうした個人的な要件とは別に、1859年の秋という時期には、特別の意味があった。この年の11月10日は、作家フリードリヒ・シラーの生誕100周年の日として、ドイツ語圏の各地で大規模な記念祭が開催されたのである。フランクフルトでも、市庁舎前ではシラーの銅像が披露され、ツンフト総出で祝祭行列と松明行列が挙行された。⁴⁰⁾ またこの年は、1848年革命の終焉から数えて10年の節目にもあたったため、記念祭はナショナリズム色の濃いものになった。こうした祝祭気分とナショナリズムの盛り上がりに乗る形で、自由ドイツ財団の設立は行われたのである。

シラー祭に先立つ10月23日、フリーメイソンのロッジ「昇光のカール

「(Carl zum aufgehenden Lichte)」で、自由ドイツ財団の創立集会が開かれた。集会に参加した創立メンバーは56名、その内41人はフランクフルト在住者だった。11月2日に採択された財団の規約は、11月10日のシラー祭当日に出版され、新聞でも公表された⁴²⁾。この創立メンバーを含めた財団の会員の構成や、社会的・政治的背景については次節で詳しく分析する。

自由ドイツ財団の会員には、当初「マイスター (Meister)」と「友人 (Freunde)」の、2つの区分が設けられた⁴³⁾。名誉会員に相当するマイスターの称号は、科学や芸術などの各分野で功績のある人物に授与された⁴⁴⁾。対して財団の正会員として活動したのが、別名「参加者 (Teilnehmer)」とも呼ばれた「友人」だった。3 グルデン半の年会費を支払い、可能ならばそれ以上の寄付をすることで財団の財政を支えることが、財団の「友人」の義務だった⁴⁵⁾。また、彼らは財団の会合に定期的に出席することが望まれた⁴⁶⁾。

マイスターには、ウィーンの解剖学者ヨーゼフ・ヒルトルやギーセンの化学者ユストゥス・フォン・リービヒ、ミュンヘンの衛生学者マックス・フォン・ペッテンコーファーなど、著名な科学者や医学者が名を連ねていた⁴⁷⁾。中には、唯物論主義の哲学者ルードヴィヒ・ビューヒナーのような急進派の名前も含まれたが、ドイツ連邦議会のオルデンブルク大公国代表、ヴィルヘルム・フォン・アイゼンデッヒャーのような、保守派の人物にも授与されたことが示すように、マイスターの選定に関しては、本人の政治的な見解よりも、当該分野における知名度の高い人物を集めることに力点が置かれていたようである⁴⁸⁾。このように名誉会員についてはその人物の政治的姿勢を問わない方針は、1863年に導入された三つめの会員区分である「庇護者 (Beschützer)」についても言えるが、それについては次節に説明を譲りたい。

設立の契機同様、自由ドイツ財団の活動目的も、ナショナリズムを前面に打ち出したものだった。フォルガーが「暫定構想」として創立の年に発行した小冊子『自由ドイツ財団』⁴⁹⁾を見てみたい。そこでは彼は、自由ド

イツ財団は「自由なるアカデミー (Gelehrtenhof) を、また自由なる大学 (Hochschule) を具現するものであり、我々の全民族の (Gesamtvolk⁵⁰⁾) 全ての科学、芸術と一般教養の流派を包括するものである⁵⁰⁾」と定義した上で、その目的は「外に向けてドイツの科学、芸術そして一般教養を、ドイツの全民族の統一された精神的国家 (Geistesmacht) として主張することと、内に向けてはこの国家と我々の民族統一の意識を活性化すること⁵¹⁾」であると謳っている。フランクフルトを財団の所在地に選んだ理由については、財団の会報に掲載した創立集会報告の中で、彼は以下のように語っている。

フランクフルトは、現在この中心都市をその最高位の国家機関の所在地とし、かつてはその王たちがこの都市で選ばれ、その歴史的な中心点がフランクフルトにある、そんなドイツそのものを[フランクフルトを] 取り巻く領土とみなさなければ、そうしたもの [= 領土] を持っていないことになるような、そんな国家の中心点なのである。⁵²⁾

政治的にも歴史的にも、ドイツの中心都市はフランクフルトであるから、財団の所在地は必然的にフランクフルトになった。そうフォルガーは書いているのである。⁵³⁾ また、彼が上記の引用中で、神聖ローマ皇帝の戴冠式やドイツ連邦の議会に言及していることから伺えるように、フォルガーの言う「ドイツ」は、オーストリアも含む大ドイツ的なものだった。

初期の自由ドイツ財団は、「暫定構想」でフォルガーが描いた通り、自然科学から文学、芸術まで、文化の諸領域全てにおける研究と教育の振興を図った。そのため財団の活動は、良く言えば多彩、悪く言えば統一性に欠けるものだった。このことは例えば1861年に、財団が持てあました動物標本のコレクションを、ゼンケンベルク協会に譲渡していることなどから

伺える。⁵⁴⁾毎月開かれる定期会合や不定期に開かれる臨時会合は、会員による研究成果の報告の場で、一般教養の推進を謳った規約の通り、会員以外の一般人も聴講することができた。⁵⁵⁾報告内容についての記録は残されていないが、財団の活動について紹介するビューヒナーの記事が、「科学を市民的なるもの、実業生活（Geschäftsleben）と融合すること」が、「最も重要な要素の一つであるようだ」と紹介しているように、学術的なテーマよりも実践的な内容が重視されたようである。

しかし1862年、ゲーテの生家であるグローセ・ヒルシュグラーベン通り74番地を当時所有していた布張り職人、ゲオルク・クラウアーが家を出たことが契機となって、自由ドイツ財団の活動は、⁵⁶⁾ゲーテの生家の購入と修復、そしてその工事の完了後は、その維持及びゲーテの功績の記念へと収斂されていった。

自由ドイツ財団に買い取られまでのゲーテの生家の扱いは、彼のフランクフルトにおける評価同様に、アンビバレントなものだった。住民の間にも、史跡としてのゲーテの家に関心を持つ者は存在した。例えば1837年に、階段の木製部品が観光客に持ち去られるという事件が起こったが、当時家庭教師を務める傍ら、フランクフルトとその周辺地域の歴史を研究していた歴史家ゲオルク・クリーグは、日記に「イギリス人。[中略]階段の手すりの端にあった大きな木の球までこっそり [中略] 持ち去る者がいるとは」と怒りと呆れ混じりに記している。また、⁵⁷⁾ゲーテの銅像が建立された1844年には、像の披露式と合わせて、家の外壁に大理石製の表示板が取り付けられた。そして1858年には、当時の所有者から家の買い取りを持ちかけられた歴史・考古協会（Geschichts- und Altertumsverein）が、市政府に家を買ひ上げてもらった上で、協会が保全を担うことを検討したが、家主の要求価格37,000グルデンが高すぎるという理由で、計画は市参事会への打診の段階で消滅した。⁵⁸⁾

しかし、そうした記念と保全に対する関心が存在する一方で、ゲーテの

生家に対する住民の無関心ぶりは、揶揄の対象になるほどに広く知られていた。以下の一文は、1844年に生家に表示板が取り付けられた時の、新聞記事からの引用である。

今年の10月22日までは、自由都市の通りをぶらついて、例えば横を走り抜けようとした手代（Commis）か散歩中の小市民（Spießbürger）に「ゲーテの家がどこにあるか、教えてもらえますか？」という質問をした訪問者には、葉巻をふかす手代なら「申し訳ないですが、自分も知りません」と答えたであろうし、小市民なら思案げに首を振って「ゲーテ、ゲーテ？その名前は全く知りませんな」[と答えたであろう]⁵⁹⁾。

建物の状態にも、こうした住民の無関心は反映されていた。ゲーテの母親によって売却された1795年以降、持ち主の手を変える度に、家には資産価値を高めるために手⁶⁰⁾が加えられた。中でも財団の直前の所有者だったクラウアーによる改装工事が、最も大規模なものだったが、その結果、財団が買い取った時の家の外観と内装は、往事とはかけ離れたものになっていった。建物の一階には、店子として家具屋と本屋が入居していたが、店舗としての営業の便宜のため、道に面した壁には新たに戸口が二つ開けられただけでなく、窓も壁を削って⁶¹⁾掘られた。また、中庭は布張り職人の工房に改造され、ゲーテが青年時代に仕事部屋にしていたとされる三階の部屋は、彼の生前のままの内装と家具付きで、2年あたり65グルデンの家賃で貸しに出されていたのである⁶²⁾。

自由都市フランクフルトの法律では、外国籍を持つ者が市内の不動産を所有することは許されていなかった⁶³⁾ので、ハノーヴァー王国の国籍を持つフォルガーが直接家を買収することは、法的に不可能だった。また、自由ドイツ財団もまだ法人としての認可が受けていなかった⁶⁴⁾ので、売買交渉は

フランクフルトの市民権を持つ商人を代理人に立てて行われた。⁶³⁾このように形で手続きを進めたのは、当時フランクフルトでは、1862年の12月末日に承認される予定の法令で、不動産の所有が外国人にも開放されることが見込まれていたからである。法令の発効を待って、フォルガーは改めてクラウアーと売買契約を締結した。購入価格は56,000グルデン。その内10,000グルデンは、頭金として家の引き渡し日である1863年3月1日を期日として支払うこととなり、残り32,000グルデンは分割払いと定められた。⁶⁴⁾契約と同時に、フォルガーと自由ドイツ財団は、フランクフルトの住民に寄付を働きかけた。その結果、財団は頭金として必要な10,000グルデンを支払い期日までに集めることができた。また、残りの購入代金の支払いと、1863年4月から約2年間をかけて行われた家の修復工事の費用も、順次財団に寄せられた寄付金で賄われた。⁶⁵⁾

1864年11月、一部の修復が完了したゲーテの家は一般に公開されることになり、同月13日、その披露式典が開催された。⁶⁷⁾フォルガーがその出席者を前に行った講演は、財団が目的とするドイツ人の精神的な統一の象徴として、ゲーテを改めて位置付けるものだった。フォルガーは、1787年にバーデン大公カール・フリードリヒが発案したが実現しなかった、全ドイツ人のためのアカデミー設立計画や、⁶⁸⁾1822年に自然哲学者ローレンツ・オーケンが創立した、ドイツ自然科学者医師学会（Gesellschaft Deutscher Naturforscher und Ärzte）などを、ドイツ人の国民的な統一を希求する動きの前例として挙げた上で、自由ドイツ財団こそが、その精神を継承するものであると訴えた。そして、ゲーテの生家を買取り、修復することを財団の目的とした時から、ゲーテは財団が推進する運動を象徴する存在になったのだ、と述べた。

かつてはゲーテの揺りかごがあり、全ての部屋が彼の幸福な成長の歴史を記憶する、私たちの財団会館の購入を通して、私たちは

ようやく、あまりにも長きにわたる放置という重罪を、父なる国（Vaterland）全体の名の元に、あがなうことが許されるでしょう。その代わりにゲーテの霊は私たちの守護霊となったのです！⁶⁹⁾

このように自由ドイツ財団による生家の買い取りを機に、ゲーテは財団が標榜する大ドイツ的なナショナリズムの看板として、再定義されたのである。以降の自由ドイツ財団の活動は、ゲーテの家の維持とともに、ゲーテの作品と、彼や彼の友人・家族に関係する品物の収集を中心に展開されるようになる。⁷⁰⁾言い換えると、財団はゲーテをドイツ人の精神的統一を象徴する人物として打ち立てるとともに、彼の記憶と精神的遺産の継承者を自任するようになったのである。では、フォルガーと財団による、こうした大胆なゲーテの領有は、フランクフルトでどのように受容され、評価されたのだろうか。それを次節では見て行きたい。

3. 自由ドイツ財団の受容

自由ドイツ財団の1863年の年次総会の席上、フォルガーは次のような強い口調で、財団がフランクフルトの有力者層から受けた、冷淡な扱いを批判した。

私たちが絶対に支持を当てにできると信じていた有力者の中には、冷ややかな態度を取ることで、他の心弱い者たちに支持を思いとどませた者もありました。友人に見えた者が、臆病さや浅ましさから私たちの良き目的を見捨てたり、背いたり、あまつさえ裏切ったりするという痛恨の体験もさせられました。⁷¹⁾

フォルガーの言葉には誇張が含まれる可能性もあるが、現実には自由ドイツ財団の活動を支えたのは、彼の言う通りフランクフルトの有力者層ではなかった。レルナーの分析が示すように、都市貴族や外交団、そして参事会員などのような、フランクフルトの政界のエリート層は、財団の創立メンバー⁷²⁾56名には含まれていなかった。また、銀行家や裕福な商人といった財界のエリート層も、絹商人のテオドーア・パサヴァントを唯一の例外として、財団の創立には関与していなかった。パサヴァントについては、ゼンケンベルク協会の会員でもあったので、その縁から加入した可能性が高い⁷⁴⁾。

このようにエリート層が財団から距離を置いた一因は、財団の政治的な性格にあった。前節に見たように、ナショナリズムの支持を明確に表明した自由ドイツ財団には、前出のビューヒナーやナショナリストの神学者カール・ブルッガー、体育運動の推進者アウグスト・ラーヴェンシュタインや1848年革命時の活動家・神学者のルードヴィヒ・ノアクなどの急進的な民主派の参加が目立った⁷⁵⁾。フォルガーが彼らと政治的に同志だったことが、彼らの参加を促したと考えられるが、こうした急進派の存在が、エリート層を遠ざける一因になった。ドイツ統一や民主主義の導入といった彼らの政治的な主張は、既存の秩序や政治基盤の転覆を狙うものとして危険視されていたので、彼らが参加した財団もまた、エリート層に警戒されたのである。

こうした不利な条件にも関わらず、自由ドイツ財団は会員数を順調に伸ばし、現存する会員名簿によれば、創立時は56名だった会員は、1864年には565名、1876年には653名を数えるようになった。中でもフランクフルトに住む会員数の伸びは大きく、1859年の41名から1864年の433名、1876年の514名と20年足らずの内に12倍以上に増えた。⁷⁶⁾

会員名簿から財団の具体的な支持者層を割り出すことは困難だが、ここでも創立メンバーの分析が一つの指標となる。フランクフルトに住む創立メンバーの73%に該当する30名は、フランクフルトの市民権を持たない者、

つまりドイツ語圏の他の領邦の出身者だった⁷⁷⁾。この事と、3.5グルデンという、労働者には高額な年会費を考え合わせると、財団の支持者層となったのは、知識人や小商人などの中間層、特にその中の他領邦の出身者であったと考えることができるだろう。

自由ドイツ財団が創立された時期は、フランクフルトにおいて他領邦出身の住民が急速に増加した時期と重なる。自由都市フランクフルトは、金融と通商の中心地として、小国ながら裕福な都市国家だったため、市内には当局から滞在許可を受けて居住する「余所者 (Fremde)」⁷⁸⁾、つまり他領邦の国籍を持つ者が多く住んでいた。コッホの統計分析によれば、世紀中頃までは市民 (市民権を持つ成年男子) と余所者の人口比は、おおよそ1対2.5前後で安定して推移していたという⁷⁹⁾。例えば1823年には、総人口約4万3千人中、市民は約5,300人、余所者は約13,300人、1855年には人口約7万5千人中、市民は8,900人、余所者は約20,500人だった⁸⁰⁾。しかし余所者の数は自由ドイツ財団が創立される1850年代の後半から急速に増加し、市民に対する人口比は1864年には1対4.2のレベルまで上昇する⁸¹⁾。これは自然増ではなく、産業の発展に伴う、市外からの移住者の増加によるものである⁸²⁾。

1864年には営業の自由が導入されるなど、こうした余所者の受容は徐々に進んだが⁸³⁾、いわゆる公の領域における彼らの活動は、世紀中頃のフランクフルトではまだ制約されていた。当時の町の結社は、市民権を持つ者だけを正会員をすることを不文律としているものが多く、中には医師協会のように、市民権を持つことを会員資格として明文化している結社もあった⁸⁴⁾。余所者は、フランクフルトに在住する者でも、投票権の無い通信会員や名誉会員にするのが慣例だったのである。ハノーヴァー王国の国籍を持つフォルガーが、ゼンケンベルク協会で講師を務めていたにも関わらず、同協会の通信会員だったのもこのためだった⁸⁵⁾。

このようにそれまでは周縁に追いやられていた余所者に活躍の途を開き、

彼らを支持者層として獲得したことが、自由ドイツ財団の成功の最大の要因だったと言えるだろう。また財団は、時にはフランクフルトの伝統的な行動規範を正面から否定するような活動をしたが、それもそうした支持者層の価値観を体現するものと理解することができる。例えば1863年、財団はゲーテの家の購入資金を集めるために、マイスターとは別に、もう一つの名誉称号である「庇護者 (Beschützer)」を導入した。この称号は、財団への寄付の見返りとして「ドイツの君主の家の一員及び自由都市の現職の市長⁸⁶⁾」に贈られた。例えばフォルガーの生国ハノーヴァーの国王は、1,000グルデンの寄付金⁸⁷⁾の見返りに、財団からこの称号を贈られている。結果として翌年までに、計4,800グルデンあまりの寄付金と引き替えに、オーストリア皇帝、プロイセン王、バイエルン王、ザクセン王、ヘッセン大公、ナッサウ公など、ドイツ語圏の主立った君主のほとんどに庇護者の称号が授与された⁸⁸⁾。

こうした制度は、フランクフルトの既存の結社には見られないものである。例えばゼンケンベルク協会の会員名簿に記載される王族は、1848年の革命の時に国民議会から帝国摂政 (Reichsverweser) に任命された、オーストリアのヨハン大公唯一人である⁸⁹⁾。そもそも他国の干渉からの自由を謳った自由都市では、他国の君主の庇護を求め、形だけでも臣従することは、フランクフルトの独立と自由の伝統に対する侮辱として受け取られたのである。例えばゼンケンベルク協会の象徴でもある、18世紀フランクフルトの篤志家・医師のヨハン・クリスティアン・ゼンケンベルクは、弟の法律家、ヨハン・エラスムスがオーストリアの男爵に叙されたことを生涯許さず、「一人の誠実な男は、貴族と男爵全部を合わせた以上のものだ。[中略]もし誰かが彼を男爵にしようと望むなら、彼を犬畜生侯爵または同男爵と罵倒すれば良い⁹⁰⁾」という発言を残している。

このようにフランクフルトの伝統的な価値観とは一線を画す財団のあり方は、旧来の住民の反発も招いた。上掲のフォルガーの引用で言及されて

いるような財団への妨害も、そうした反発の表れと見ることができるが、その責任の一端は、伝統的な住民感情への配慮を欠いた、フォルガー自身の言動にもあった。例えば財団の設立の際には、彼は「すでにここ〔フランクフルト〕に存在する、科学、芸術、そして一般教養のための結社や施設は全て、事実上すでに自由ドイツ財団の一部なのです⁹¹⁾」と述べて、断りなく既存の結社を財団の構成要素扱いしている。また、財団を創立した頃から、彼は自分を上述のゼンケンベルクになぞらえるようになり、書簡や出版物に「オットー・フォルガー、またの名をゼンケンベルク⁹²⁾」と署名するようになった。こうした彼の言動が旧来のフランクフルト住民の感情を逆撫でし、財団や彼への反感を招く一因にもなったと言えるだろう。

1864年、ゼンケンベルク協会の運営会議の席上で、フォルガーと自由ドイツ財団を巡って論争が起こった。この事件は、旧来の住民の間で財団がどのような評価を受けていたのかを直接示す、興味深い事例であるので、この節の最後に紹介したい。論争の契機は、1月13日の運営会議で古参会員から出された、以下のような提案だった。

ここ〔フランクフルト〕に永住する会員だけが運営会議に出席するべきである、と彼〔提案者〕は望んでいる。幾度か起こった言い争いと仲違いのために、多くの会員、特に古参の者にとっては、何もかもが台無しにされてしまった。提案者は、フォルガー氏が、彼が率いる財団を護ろうとすることは責めていないが、それが我々の協会に害をもたらししている、という。財団はフランクフルト⁹³⁾の協会ではないのだ。

この提案をしたのは、昆虫学者・政治家のカール・フォン・ハイデン(1793-1866)である。彼はフランクフルトの伝統的なエリートの家系である都市貴族の生まれであり、参事や市長を歴任した有力な保守派の政治家でも

あった。⁹⁴⁾ハイデンの提案は、フランクフルトの市民権を持たないフォルガーを、協会の運営会議から締め出すことを求めるものである。この提案に、同席していたフォルガーは「このような見解がここフランクフルトでいまだ支持されていることを遺憾に思う」⁹⁵⁾と猛反発し、両者は真っ向から対立した。結局この時は、会議の出席者数が、規約に定められた、議決に必要な人数を満たさなかったため、議長の提案でハイデンの提案は議事録に記載されるだけにとどめられた。

この時は引き下がったハイデンは、彼を支持する会員の意見を取りまとめて、翌2月20日の運営会議に、正式な規約改変の動議を提出した。以下の通り、ハイデン以下14名の会員の名前で提出された動議は、フランクフルトの市民権を持たない者を、協会の運営から排除することを要求するものだった。

- 1.ここに住む通信会員は運営会議に入れない。
- 2.幹部とセクション担当は、ここの市民のみから選出する。
- 3.ここ（協会内）で発表された講義についての出版物を刊行することを、全ての会員に禁止する。⁹⁶⁾

ゼンケンベルク協会の運営会議では、正会員だけが投票権を持っていたものの、通信会員にも出席と発言は認められていた。そのためフォルガーも、積極的に運営会議に出席して論陣を張り、会員の間に賛同者を募ることで協会の運営に影響力を行使できたのである。三点目の要求である講義内容の出版禁止は、人気講師として出版物を刊行していたフォルガーに対する嫌がらせだった。

この提案には、上述のように14名の正会員が支持を表明していた。当時会員名簿に登録されていた正会員は約60名だったが、実際に運営会議に出席し、博物館のセクション担当として活動していたのは、その約半数だっ

⁹⁷⁾た。そのためこの数字は、当時協会で稼働していた会員の半数近くが、ハイデンの提議に同意したことを意味する。

フォルガー不在の中、会議の出席者は激しい論戦を交わした。争点は「余所者 (Fremde)」, つまりフランクフルトの市民権を持たない者を、協会の運営に関わらせるべきか否かだった。議長を務めた医師のグスタフ・アドルフ・シュピーースは、「営業の自由が導入され、居住の自由 [の導入] も見込まれているような時に」このような提案は受け入れられない、と反対を表明し、自由主義派の政治家・医師であるゲオルク・ファーレントラップも「彼の長年のここでの個人的・政治的な生活の中で、ここに提出された提議の他に、こんな反動は未聞だ」と同様に反対した。⁹⁸⁾しかしこうしたリベラル派の意見に対して、ハイデンは「これまでのままでは、彼は協会の破滅を予見しているから」と譲らず、⁹⁹⁾彼を支持する保守派の会員からは、「余所者は協会の資産状況について口出しすることなどない」、「経験上、不愉快なことばかり起こしてきたから、だから外国人には居て欲しくないのだ」と次々と発言が出され、議論は平行線を辿った。¹⁰⁰⁾結局、この時も結論はうやむやのまま散会し、保守派の動議が繰り返されることはなかった。

この論争を、ただの結社の内紛と片付けることはできない。フランクフルトでも歴史が古く、ハイデンやファーレントラップのような現役の政治家を会員として擁していたゼンケンベルク協会は、ただの自然誌研究の場ではなく、市の政界とも強い繋がりを持つ有力な結社だった。¹⁰¹⁾つまり協会内での対立関係は、フランクフルトのエリート層内部の状況の縮図でもあったのである。そのような結社の中で、フォルガーを危険視し排除しようとする保守派と、彼の活動を許容し擁護するリベラル派の勢力が拮抗したことには、重要な意味がある。つまり、この論争の帰結は、フランクフルトのエリート層の間でも、フォルガーと自由ドイツ財団の活動に対する理解が存在したことを示唆するものなのである。また、フォルガーを最も積

極的に擁護した会員の一人であるシュピースが、1844年のゲーテ銅像設立を行った委員会の一員であったことも注目に値する。¹⁰²⁾自由ドイツ財団の活動は、それ以前からゲーテを肯定的に評価していた旧来の住民からも、ある程度の同意をもって迎えられていたのである。

おわりに

ドイツのナショナルな統一を是とする自由ドイツ財団は、自由都市としての既存の政治秩序の維持を重視するフランクフルトのエリート層の警戒を招いたため、彼らの支持を得ることはなかった。そうした不利な条件にも関わらず財団が成功したのは、町に住む「余所者」、つまりフランクフルト以外の領邦出身の住民から支持を得ることが出来たからである。言い換えると、彼ら余所者を支持者層として獲得した自由ドイツ財団は、当時の都市化が加速するフランクフルトにおける、結社文化の担い手の多様化を体現していたのである。

ゲーテを財団の、そしてネーションの象徴として顕彰した財団の活動は、そうした新しい支持者層の価値観を代弁するものだった。19世紀中頃までのフランクフルトでは、都市共和国としての伝統を重んじ、自由で特権的な市民であることを矜持とする言説が支配的だった。ゲーテが選択した生き方は、そうした伝統的な価値観とは相容れないものだったため、故郷での彼の評価は、反発や無関心の混ざる、アンビバレントなものであり続けたのである。自由ドイツ財団はそうした状況を覆し、ゲーテをネーションの精神的統一の象徴として再定義し、彼の家を記念事業の中心として確立した。これは、財団の支持者層の間では、フランクフルトの伝統的な価値観を否定したゲーテの生き方が、逆に積極的な評価の対象だったことを示唆するものである。

フォルガーと自由ドイツ財団の評価を巡る、ゼンケンベルク協会内部の論争は、フランクフルトのエリート層の政治意識の変容を示すものだった。町の結社の中ではエリート層に近い、ゼンケンベルク協会のような結社の中でさえ、保守派とリベラル派が拮抗する事態を迎えたことは、急速に都市化が進む当時のフランクフルトにおいて、町の支配的な言説が交代しつつあったこと示唆する。つまり、既存のエリート層の中にも、自由ドイツ財団の理念や活動を理解し、受け入れる人々が現れていたのである。このように自由ドイツ財団の登場とゲーテの「帰郷」は、フランクフルトという都市の公共圏の拡大と多様化を体現し、自由都市の優越性を誇る伝統的な政治的言説に対抗する、新しいナショナリスティックな言説の登場を象徴するものとして、フランクフルトの歴史上、画期的な事件だったと言えるだろう。

注

- 1) Wolfgang Klötzer, 'Frankfurt am Main von der Französischen Revolution bis zur preußischen Okkupation 1789-1866,' Frankfurter Historische Kommission (Hrsg.), *Frankfurt am Main. Die Geschichte der Stadt in neun Beiträgen*, Sigmaringen, 1991, S. 318; Rainer Koch, 'Lebens- und Rechtsgemeinschaften in der traditionellen bürgerlichen Gesellschaft: Die freie Reichsstadt Frankfurt am Main um 1800,' Christoph Jamme, Otto Pöggeler (Hrsg.), "*Frankfurt aber ist der Nabel dieser Erde*" *Das Schicksal einer Generation der Goethezeit*, Stuttgart, 1986, S. 21.
- 2) 例えばボイルの研究は、ゲーテとフランクフルトの関係を詳細に論じているが、彼の生地における評価については論じていない。同様に、コンラディのような伝記研究においても注目されていない。Nicholas Boyle, *Goethe: Der Dichter in seiner Zeit*, Bd.1, 1749-1790, München, 1991; Karl Otto Conrady, *Goethe: Leben und Werk*, Bd. 2, Summe des Lebens, Königstein am Taunus, 1985.
- 3) 結社の定義は Thomas Nipperdey, 'Verein als soziale Struktur in Deutschland im späten 18. und frühen 19. Jahrhundert', in Thomas Nipperdey (Hrsg.), *Gesellschaft, Kultur, Theorie*, Göttingen, 1976, S. 174-205, 438-47 参照。
- 4) Nipperdey, 'Verein'; Wolfgang Hardtwig, 'Strukturmerkmale und Entwicklungstendenzen des Vereinswesens in Deutschland, 1789-1848', in Otto Dann (Hrsg.), *Vereinswesen und bürgerliche Gesellschaft in Deutschland*, München: Oldenbourg, 1984, S.

11-50 等参照。

- 5) 川北稔編『結社のイギリス史』山川出版社, 2005年; 小関隆編『世紀転換期イギリスのりびと—アソシエーションとシティズンシップ』人文書院, 2000年; 二宮宏之他『社会的結合』岩波書店, 1989年; 福井憲彦編『アソシアシオンで読み解くフランス史』山川出版社, 2006年等参照。
- 6) Fritz Adler, *Freies Deutsches Hochstift: seine Geschichte. Erster Teil 1859-1885*, Frankfurt am Main, 1959; Paul Neumann, *Das Freie Deutsche Hochstift. 1859-1909, Jahrbuch des Freien Deutschen Hochstifts*, 1910, S. 277-92; V. Valentin, *Das Freie Deutsche Hochstift. Seine Entstehung und seine Thätigkeit*, Frankfurt am Main, 1889 等。
- 7) 未刊行史料は自由ドイツ財団所蔵の未刊行史料は史料番号と FDH の略号, 同様にゼンケンベルク自然研究協会は SNG, フランクフルト都市史研究所 (Institut für Stadtgeschichte) は ISG の略号で表記した。
- 8) J. G. 'Goethe und Frankfurt. Zum 28. Aug. 1879,' *Die kleine Chronik*, 31. Aug. 1879, S. 1.
- 9) Wolfgang Klötzer, *Frankfurter Biographie*, Bd. 1, Frankfurt am Main, 1994, S. 261-8.
- 10) G. L. Kriegk, *Brüder Senckenberg. Eine biographische Darstellung. Nebst einem Anhang über Goethe's Jugendzeit in Frankfurt a. M.*, Frankfurt am Main, 1869, S. 330.
- 11) Ibid., S. 25.
- 12) Ibid., S. 25.
- 13) Roth, ' "... der blühende Handel macht uns alle glücklich ..." Frankfurt am Main in der Umbruchszeit 1780-1825,' *Historische Zeitschrift*, 1991, Beiheft 14, S. 357-408.
- 14) Klötzer, 'Frankfurt,' S. 318.
- 15) Klötzer, *Frankfurter Biographie*, Bd. 1, S. 393-4.
- 16) Anton Kirchner, *Ansichten von Frankfurt am Main, der umliegenden Gegend und den benachbarten Heilquellen* (Frankfurt am Main, 1818), vol. 2, 140.
- 17) Wilhelm Stricker, *Goethe und Frankfurt am Main. Die Beziehung des Dichters zu seiner Vaterstadt*, Berlin, 1876, S. 46.
- 18) Ch. Creizenach (Hrsg.), *Briefwechsel zwischen Goethe und Marianne von Willemer (Suleika)*, Stuttgart, 1878, S. 260.
- 19) M. Belli-Gontard, *Lebens-Erinnerungen*, Frankfurt am Main, 1872, S. 279.
- 20) Rudolf Heilbrunn, *Schicksal und Leistung der Frankfurter Juden in der neueren Zeit*, Manuskript, ca. 1957, ISG Jdt 101, S. 82.
- 21) Klötzer, 'Frankfurt,' S. 318; Stricker, *Goethe*, S. 47-8; Philipp Friedrich Gwinner, *Kunst und Kultur in Frankfurt: vom dreizehnten Jahrhundert bis zur Eröffnung des Städelschen Kunstinstituts*, Frankfurt am Main, 1862, S. 419.
- 22) Koch, 'Lebens- und Rechtsgemeinschaften,' S. 21.
- 23) J. G., 'Goethe und Frankfurt. Zum 28. August 1879,' *Die kleine Chronik*, 31. Aug.

- 1879, S. 4.
- 24) Gwinner, *Kunst*, S. 424-5.
- 25) Stricker, *Goethe*, S. 50.
- 26) 例えば 'Noch eine Meinung über einen Platz für das Goethe-Denkmal,' *Frankfurter Gemeinnützige Chronik*, Nr. 5, März, 1844, S. 43-4.
- 27) 'Frankfurt a. M., Oktober. Enthüllung der Statue Goethes,' *Morgenblatt für gebildete Leser*, 1. Nov. 1844, S. 1052.
- 28) 'Frankfurt. Die festliche Enthüllung Göthe-Denkmal in Frankfurt am 22. Oktober 1844 (Schluß),' *Frankfurter Konversationsblatt*, 30. Okt. 1844, S. 1211-2.
- 29) Ludwig Hub, 'Göthe. Am 22. October 1844,' *Didaskalia*, 23. Okt. 1844.
- 30) Adler, *Hochstift*, S. 24-28.
- 31) *Ibid.*, S. 24-28.
- 32) *Ibid.*, S. 28.
- 33) この金額は, フォルガーの後任者の給与の領収書から得た。フォルガーの領収書は残っていないが, 講師の給与額が変更されたという記録はないため同額だった可能性が高い。Belege (zu Rechnungsablage durch Theodor Passavant u. a.) vom 1867, SNG, Nr. 784 61.
- 34) *Frankfurter Anzeiger nebst Beilage*, Belege (zu Rechnungsablage durch Theodor Passavant u. a.), SNG Nr. 784 36.
- 35) Vertrag für Mylius-Stiftung für Vorlesungen, Mailand, 5. April 1854, ISG V48/450 Dr. Senckenbergische Stiftung.
- 36) Waldemar Kramer, *Chronik der Senckenbergischen Naturforschenden Gesellschaft*, Frankfurt am Main, 1967, S. 281.
- 37) Adler, *Hochstift*, S. 31; Wilhelm Kobelt, Tagebuch 22. März 1874 bis 20. Juni 1878, ISG S5/163, S. 205.
- 38) Vertrag für Mylius-Stiftung für Vorlesungen, Mailand, 5. April 1854, ISG V48/450 Dr. Senckenbergische Stiftung.
- 39) Protokollbuch, vol.4, 1854-72, SNG 5, S. 127-28. フォルガーは1861年に辞職するまで講師を勤めた。Adler, *Hochstift*, S. 31.
- 40) Protokollbuch, vol.4, 1854-72, SNG 5, S. 127-28.
- 41) Adler, *Hochstift*, S. 17-21.
- 42) *Ibid.*, S. 17-21.
- 43) *Satzungen des Hochstiftes für Wissenschaften, Künste und allgemeine Bildung zu Frankfurt am Main*, Frankfurt am Main, 1859, S. 4-5.
- 44) *Ibid.*, S. 5.
- 45) *Ibid.*, S. 4-5.
- 46) *Ibid.*, S. 3.

- 47) 'Verzeichniß der Mitglieder des Freien Deutschen Hochstiftes,' *Berichte über die Verhandlungen des Freien Deutschen Hochstiftes*, 1864, S. 3-20.
- 48) Ibid., S. 3-20.
- 49) Georg Heinrich Otto Volger, *Das Freie Deutsche Hochstift für Wissenschaften, Künste und Allgemeine Bildung zu Frankfurt am Main*, Frankfurt am Main, 1859.
- 50) Ibid., S. 29.
- 51) Ibid., S. 29-30.
- 52) 'Gründngs-Versammlung, Weinmonat, 23. October 1859,' *Bericht über die Verhandlungen des Freien Deutschen Hochstiftes*, 1860, S. 3.
- 53) 'Gründungs-Versammlung,' S. 3.
- 54) Otto Volger, Brief an Dr. med. Lucae, 18 Jan. 1861, Nr. 3, Volgeriana 1859-1886, SNG, Nr. 35.
- 55) 'Das freie Deutsche Hochstift in Frankfurt a. M.,' *Illustrirte Zeitung*, 15. Aug. 1863, S. 123.
- 56) Adler, *Hochstift*, S. 112, 115-6.
- 57) 下線部は原文に従った。G. L. Kriegk, Tagebuch von Georg L. Kriegk, Universitätsbibliothek Johann Christian Senckenberg, Handschriftenabteilung, Ms. Ff. G. L. Kriegk, IV Tagebücher, Teil 1, S. 19-20 ; Klötzer, *Frankfurter Biographie*, Bd. 1, S. 430.
- 58) Adler, *Hochstift*, S. 115-7.
- 59) 'Frankfurt. Die festliche Enthüllung Göthe-Denkmales in Frankfurt am 22. Oktober 1844. (Forsetzung),' *Frankfurter Konversationsblatt*, 28. Okt. 1844, S. 1203.
- 60) Adler, *Hochstift*, S. 101.
- 61) Ibid., S. 112.
- 62) Ibid., S. 112.
- 63) Ibid., S. 115.
- 64) Ibid., S. 115-7.
- 65) Ibid., S. 118.
- 66) Ibid., S. 117-25.
- 67) Ibid., S. 122-3.
- 68) G. H. Otto Volger, *Entwurf zu einer Vereinigung der geistigen Volkskraft Deutschlands*, Frankfurt am Main, 1864, S. 8.
- 69) 下線部及び強調部分は原文に従った。Volger, *Entwurf*, S. 13.
- 70) *Satzungen des Freien Deutschen Hochstiftes*, Frankfurt am Main, 1863, S. 3-4; Adler, *Hochstift*, S. 126.
- 71) Volger, *Entwurf*, S. 13.
- 72) Franz Lerner, 'Die ersten Mitglieder des Freien Deutschen Hochstifts. Eine biographisch-soziographische Studie,' *Archiv für Frankfurts Geschichte und Kunst*, Bd.

- 47, 1960, S. 72.
- 73) Ibid., S. 66, 72.
- 74) Ibid., S. 66, 72.
- 75) 会員の総数で見た場合、彼らはあくまで少数派だった。Ibid., S. 64-6, 69, 71-2.
- 76) Ibid., S. 63-74; 'Verzeichniß der Mitglieder des Freien Deutschen Hochstiftes,' *Berichte über die Verhandlungen des Freien Deutschen Hochstiftes* (1864) 3-20; 'Verzeichniß der Hohen Beschützer sowie sämtlicher Genossen des Freien Deutschen Hochstiftes,' *Berichte des Freien Deutschen Hochstiftes* (1876) 1-59.
- 77) Lerner, 'Die ersten Mitglieder'.
- 78) 1858年頃のフランクフルト近郊の左官の日当は1グルデン6クロイツァーである。
Jochen Dollwet, Thomas Weichel (Hrsg.), *Das Tagebuch des Friedrich Ludwig Burk. Aufzeichnungen eines Wiesbadener Bürgers und Bauern 1806-1866*, Wiesbaden, 1994, S. 194-5.
- 79) Koch, 'Lebens- und Rechtsgemeinschaften,' S. 29-30; Rainer Koch, *Grundlagen bürgerlicher Herrschaft. Verfassungs- und sozialgeschichtliche Studien zur bürgerlichen Gesellschaft in Frankfurt am Main (1612-1866)*, Wiesbaden, 1983, S. 205.
- 80) 市民と余所者の人口は、Ralf Roth, *Stadt und Bürgertum in Frankfurt am Main: ein besonderer Weg von der ständischen zur modernen Bürgergesellschaft*, S. 47; Roth, 'Liberalismus in Frankfurt am Main 1814-1914,' *Historische Zeitschrift*, Beiheft 19, 1995, S. 45; Koch, *Grundlagen*, S. 205 のデータを合わせて算出した。
- 81) Koch, *Grundlagen*, S. 205-8.
- 82) Ibid., S. 205-8.
- 83) Roth, *Stadt und Bürgertum*, S. 479-80.
- 84) de Neufville, 'Jahresbericht des ärztlichen Vereines,' *Jahrebericht über die Verwaltung des Medicinalwesens*, Bd. 1, 1857, S. 238.
- 85) Senckenbergische Naturforschende Gesellschaft zu Frankfurt a. M. Mitglieder-verzeichniß vom 22. November 1817 an, SNG, ohne Nr.
- 86) Satzungen des FDH, S. 9.
- 87) Adler, *Hochstift*, S. 122-23.
- 88) Ibid., S. 122-23.
- 89) Kramer, *Chronik*, S. 297.
- 90) Kriegk, *Brüder Senckenberg*, S. 253.
- 91) 'Gründungs-Versammlung,' S. 3.
- 92) 例えば Volger, *Entwurf*.
- 93) Protokollbuch, Bd. 4, S. 249-50.
- 94) Klötzer, *Frankfurter Biographie*, Bd. 1, S. 329.
- 95) Protokollbuch, Bd. 4, S. 250.

- 96) Ibid., S. 250-51.
- 97) Mitgliederverzeichnis vom 22. November 1817 an.
- 98) Protokollbuch, Bd. 4, S. 251-2.
- 99) Ibid., S. 250-1.
- 100) Ibid., S. 251-2.
- 101) ゼンケンベルク協会の活動と位置付けについては, Ayako Sakurai, *Science, Identity and Urban Reinvention in a Mercantile City-State: The Associational Culture of Nineteenth-Century Frankfurt am Main*, Ph.D. Dissertation, University of Cambridge, 2007 の1章と4章を参照。
- 102) 'Die Festwoche der Enthüllung des Goethe-Monumentes zu Frankfurt am Main,' *Frankfurter Gemeinnützige Chronik*, Nr. 24, Okt. 1844, S. 171.